



映画とアコと音楽と そのI

アコーディオンの出てくる映画を4本、2回に分けてご紹介しようと思う。私はマニアックな映像や絵が好きなので小声でのお奨めです。こんな映画もあるという事で。

『耳に残るは君の歌声』（2000年英仏。サリー・ポッター監督）

舞台は1927年のロシア。ロシア系ユダヤ人の幼い娘は父と祖母と幸せに暮らしていた。歌う父、肩車の娘の幸せなひととき。父の子守唄が映画のタイトルの曲だ。

やがて父はアメリカへ出稼ぎに。祖母との寂しい生活。森に一人出かけ父を思う日々。ユダヤ狩りで村に火を放たれ馬車で脱出する子供たち。馬も力尽き娘は父の写真と一枚の金貨だけを持ちアメリカを目指し港に辿り着くも手違いで乗せられた船が着いたのは英国。子の無い夫婦に引き取られスージーと名前を与えられ英語の解らぬ娘はさらに孤独を深める。

彼女を厳しくも愛情ある音楽教師が歌を教え導く。卒業と同時に職を求めてパリへ向かう。レビューの踊り子、オペラのバックコーラスなどの仕事を得てロマの青年（ジョニー・デップ）との恋、二次大戦勃発、アメリカへの脱出などを絡めて激動流転の人生を歩む。やがてハリウッドで成功したものの今は重病の床にある父との再会を果たす。父

に歌って聴かせるのはあの子守唄だ。戦前のシャンソン～ロマ音楽～オペラ～タンゴ～カンツオーネなどが色とりどりにロックに感染する以前の欧州の音楽が主人公の激動の人生を彩ってゆく。

タイトルの『耳に残るは君の歌声』はビゼーの「真珠採り」のアリア。ユダヤ狩のパリに流れる『暗い日曜日』。ロマの葬式では仲間のバンド（アコーディオン、バイオリン、コントラバス）が演奏しながら野辺送りする。特に印象的だったのは少女時代のスージーがクラスメイトの前で披露するパーセルのオペラ「ディドとエネアス」から『ディドの悲しみ』。年頃になって恋をする彼女（クリスティーナ・リッチ）はこの歌をロマのバンド伴奏で歌う。こんなパーティーがあったら是が非でも参加したい。アコーディオンと人の声はどちらも息で発声するから？とても馴染む。伴奏が面白い事と気づくきっかけの一つになった映画だ。

『ベルヴィル・ランデブー』（2003年仏・英・白・加・ラトビア・米。シルヴァン・ショメ監督）

アニメ映画である。舞台は1950年頃のフランス。親の無い孫息子を大事に育てているお祖母ちゃん。孫の寂しさをあの手この手で慰めようとするが残念ながら今ひとつ的中していないようだ。

実は孫は自転車が好きでツールドフランスに出たいのだ。気づいたお祖母ちゃんはもう全力で日々サポートしちゃう。成長した孫は念願叶ってツールドフランスの選手としてレースに参戦するが途中で何故か誘拐されてしまう。お祖母ちゃんは古い友人に協力してもらい孫の救出に向かうのだが。。。デフォルメが独特だが自分の子供時代の外国アニメのようで懐かしさを覚える。カラーリングがまたアニメとは思えない位お洒落でシック。作中には色々な有名人が登場する。皆はつきり

名乗らないけれど明らかにジャンゴ・ラインハルト、ジョゼフィン・ベイカー、フレッド・アステア、グレン・グールド。そしてフランスではとても有名なアコーディオニストのイヴェット・オルネ！私は知らなかったのだがツールドフランス専属のアコーディオニストだったという。自転車レースにアコの演奏家が「専属」とは不思議だがとてもフランスらしい。お祭りにアコーディオンはびったりなもの。（彼女がつい先日、6月11日に亡くなった事を知った。この原稿を書き終えた今日は6月18日である）

《和里田 えり子》

■次回予告：映画『他人の顔』と『フリークスも人間も』です、ご期待ください。

♪坂本光世「アコーディオン独演会 其の七」ぶらり訪問記♪

日時：2018年6月3日(日)14:00開演 会場：渋谷 ラトリエ byAPC

ちょっと汗ばむくらいの昼下がり、坂本光世さんの演奏を聴いてきました。

初めて足を運んだ会場の「ラトリエ」は坂本さんの独演会場として聞き覚えがありました。渋谷駅前の明治通りに面していて、駅から徒歩7分ぐらいです。中へ入ると、壁にはヴァイオリンを飾ったガラス張りの窓がいくつもはめ込んであり、80名ほどの会場なので室内楽などにはいい感じです。ステージは通り側にあって、奥に向かったの座席も中ほどから奥は15cmぐらいの階段状につくられているので、むしろ後ろの席の方が前の方の頭が気にならずにステージが見やすく感じました。

プログラムは、10分程度の休憩を挟み前半、後半の2部に分かれています。

登場を促す拍手に誘われて出てこられた演奏者はピンクのドレスで登場。緊張していたと思うのですが衣装のせいかな、表情がとても柔らかく見えました。

最初の曲は、「2つのギター&チャルダッシュ」説明では、2つのギターを弾いていて、どこかチャルダッシュに似ていると感じたのでこの二つを合体できないかと考えてアレンジしたとのこと。「2つのギター」はゆっくりしたテンポ、「チャルダッシュ」は早いテンポといったイメージを持っていたけれども、聴いていて違和感はありませんでした。

2曲目の「花笠音頭 - マカショでジャイブ -」は、ジャズっぽくということさらりと弾いていました。もっと力強く演奏されても良かったのかなあと感じたけれども、ベローストップが上手で軽快な歯切れの良い演奏でした。

4曲目の「かつこう - バロック音楽 -」では、“バロック音楽をスタンダードベースで

弾くのは難しくとても苦労しました”と話していたけれども、左手ベースで「かつこう」と表現するところはとても魅力的でした。また、「コンドルは飛んで行く変奏曲」は、良く聴く編曲とはだいぶ違います。途中からサンバ風にリズムを変えてみたり、音の重なりが効果的に使われていたり、日本の民謡風にも聴こえたりと、“私はこんなふう弾いてみたい”と自身で編曲できる力は羨ましいですね。

前半最後の2曲「エル・チョコロ」と「クーバン・チャント」はアコーディオンを降ろし、ピアノ演奏でした。

休憩後の後半は真っ赤なラメ入りのジャケットと黒のミニスカートでの登場。

最初は「ダークアイズ変奏曲」この曲もそうですが、編曲が変わると随分曲の感じも変わります。次に「カルメン序曲」を弾いた後は、シャンソン歌手、麻生ミエさんを迎えて「新カルメン」「アコーディオン」をアコーディオン伴奏で演奏。次の「オー・シャンゼリゼ」は、プログラムにある歌詞を見ながら会場の皆さんと一緒にうたい、アンコールに、シャンソンの名曲「生きる」のうたの伴奏で終了となりました。

会場は演奏者との距離が近いので、鍵盤を移動する指の動きが手に取るように分かります。どの指を基準に動かしているか、次の音を探る指の動きが見えるので、教則本を見ているような感じで私にはそんなところもとても参考になった独演会でした。※写真は、当日は撮影していないので、以前スタジオで写した写真で良ければお使下さい。とのことで提供頂きました。（記：乙津）



♪あじさいコンサート♪ ★～アコーディオンは歌う平和な明日への願い～★

2018年6月23日(土) 川越西文
会館「メルト」においてあじさいコンサ
ートを開催いたしました。

開場時刻に合わせるかのように雨が降
り始めましたが、お客様は続々と詰めかけ
てくださり320人を超え、会場はほぼ満
員でした。

演奏は二部に分かれ 一部は[大正・昭
和・平成からのメッセージ]とし、ソロ4
曲、デュオ2曲、アンサンブル3曲を演奏
しました。

一部の最後は、今回も司会者として一人
一人に丁寧な聞き取りをして笑いも交え
ながら場を最大限盛り上げてくださりサー
クル員以上の活躍をしてくださった桑
田さん率いる「香片人」の若さと力強さを
感じた演奏でした。



二部は
[平和な明
日への願
い]とし、
ソロ3曲、
松永先生

とピアノの鶴原裕子さんのお楽しみプロ
グラム「ヴェノスアイレスの秋」「東京ブ
ギウギ」の演奏でした。

そして歌とアコーディオン15台、ピア
ノ、ドラムによるアコーディオンオーケス
トラの「チャップリンからレ・ミゼラブル」
の迫力ある演奏でした。さらに金澤さんの
声量たっぷりの透き通るような歌声に魅
了されました。

今回の公演もたくさんのお客様が開演
から終演まで長時間ご覧いただき、「とて
も迫力がありました」「演出が素晴らしか
った」「楽しい時間でした」「青春を思い
出しながら口ずさみました」「次回も是非
来たい」など心温まる励ましのお声をいた
きました。

メッセージカードやアンケートも司会
者の口添えがありたくさんの方からいた
だき本当にありがたいです。

最後に本公演のお手伝いを快くやって
いただいた舞台監督の松井さんはじめ、ス
タッフの皆様本当にありがとうございました。
2年後にまたお会いしましょう！！
川越アコーディオンサークルたんぼぼ
柴山喜巳子

